教　育　研　究　業　績

氏名　　青木　洋子
学位　修士（教育学）

研究分野	研究内容のキーワード
子ども学、心理学、生活科学	子ども学（子ども環境学）、教育心理学、食生活学

主要担当授業科目	発達心理学 II、子どもと心理学、子どもの理解と援助、発達環境へのアプローチ A,課題研究 A、課題研究 B ほか

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）オンデマンド授業補足資料作成	令和 3 年 10 月 1 日～令和 4 年 3 月 31 日	埼玉大学「乳児保育概論」がオンデマンド実施されたことに伴い、保育や研究に対する理解を深めさせること及び対面で発生する雑談の機能を補うため、教員が保育所での研究観察で感じたことや子どもの行動を紹介した資料を PDF ファイルで作成し配布した。
2）成績評価方法の変更	令和 2 年 4 月 1 日～9 月 30 日	東京家政学院大学「健康・食発達心理学」においてこれまで知識を確認する試験を実施していたが、「健康」に対する価値観には心理面が反映し一律に定められない点を認識させるため、評価をレポート課題とし、科学的根拠を示した上で学生自身の考えを述べさせた。
3）保育園連絡帳通信欄作成の指導法	令和 3 年 4 月 1 日～令和 5 年 9 月 20 日	立正大学「乳児保育 II」において、連絡帳記入の練習だけでなく、文章表現に問題のある記入例を提示し、学生に指摘させることで文章作成における第三者的視点を獲得させるよう工夫した。
2　作成した教科書，教材 1）動くあかちゃん事典（佐々木正人編著『アフォーダンスの観点から乳幼児の育ちを考察』付属 DVD）	平成 20 年 11 月 19 日	日本医歯薬専門学校「対人援助講座」にて子どもが家庭内で自然に発達していく様子を視覚的に理解させるため、動画教材として使用した。 制作　付属 DVD
2）根ケ山光一・外山紀子・河原紀子編　『子どもと食：「食育」を超える』	平成 26 年 4 月 30 日	第 3 章「食器具操作と身体」を執筆。東京家政学院大学「健康・食発達心理学」において、食に関連する子どもの発達を医学、心理学、文化人類学等多面的に理解するため参考書として使用している。 執筆　pp. 43-57
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）2021 年度学生による授業評価	令和 3 年 11 月	東京家政学院大学「健康・食発達心理学」の授業評価で、満足・ほぼ満足の割合が約 7 割、多様な話題を取り扱い、興味関心が広がったとのコメントが多数挙がった。
2）2022 年度学生による授業評価	令和 4 年 8 月	白梅学園大学「乳児保育Ⅱ」の授業評価の総合評価で、教員は良かったと回答した割合は約 9 割、対応が丁寧と評価された。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）埼玉県保育士等キャリアアップ研修	令和 2 年 2 月 17・21 日 令和 3 年 1 月 21・27・28 日/2 月 1・3・5 日 令和 3 年 10 月 6・7 日/10 月 13・16 日	「乳児保育」講師

	/11 月 4･5 日/11 月 17・18・19 日/12 月 1・2 日/12 月 8・9・10 日 令和 4 年 10 月 3・5 日/10 月 12・13 日/10 月 24・26 日/11 月 9・10・16 日/12 月 14・15 日/1 月 12・14 日/1 月 25・26 日/2 月 22・27 日	
5　その他 1）高等学校での出張授業	令和 6 年 2 月 16 日	都立杉並高等学校　（保育の心理学）

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		特になし
2　特許等		特になし
3　実務の経験を有する者についての特記事項		特になし
4　その他 1）遊具改良調査委託研究 株式会社ジャクエツ環境事業遊具改良プロジェクト	平成 22 年 11 月 8 日～平成 23 年 7 月 31 日	幼児教育施設向け製品の製造・販売を行う企業の遊具改良の取り組みにおいて、調査委託を受け研究を実施した。現行のスプリングトイでの年齢別の遊び方の特徴を明らかにし、改良点を提案した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著･共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1　動く赤ちゃん事典（佐々木正人編著　アフォーダンスの観点から乳幼児の育ちを考察　付録 DVD） （再掲）	共著	平成 20 年 11 月	小学館	乳児２名の生後３年間の日常場面を縦断的に記録した計 150 時間の映像データから、子どもと周囲の環境との関わりを捉えた場面を各約 1 分間の動画に分割し、940 クリップ抽出した。それら全てに複数のキーワードを付し、月齢やキーワードから動画を検索できる DVD を作成した。本研究は東大あかちゃんプロジェクトとして文部科学省科学研究費（課題番号 13224015）の補助を受けて行われ、クリップ抽出とキーワードの選定を担当した。 （佐々木正人・高橋綾・山﨑寛恵・西﨑実穂・青木洋子・野中哲士・黄倉雅広・林浩司・関博紀・宮田雅子）
2 子どもと食：「食育」を超える （再掲）	共著	平成 26 年 4 月	東京大学出版会	第３章「食器具操作と身体」を執筆した。食器具操作の発達心理学的知見に加え、道具と身体の

				関係を道具論、デザイン論、文化人類学、生物学から考察した。また乳児が食事中に一見遊んでいるように見える行動は、食器のアフォーダンスを発見するための探索活動であること、成人の食事道具の操作は、食べ物の性質や身体機能と関連し、一回の食事の中でも動きに変化があることを示した。以上から道具のデザインには、行動の観察が不可欠であることを主張した。 （根ケ山光一・外山紀子・河原紀子・青木洋子・荒木暁子・板子絵美・今田純雄・上野有里・大村敬一・表真美・河合崇行・川田学・黒石純子・酒井朗・榊原洋一・関根道和・関はるこ・田中敬子・田村文誉・則松宏子・長谷川智子・村上八千世・山口真美・横尾（伊東）暁子・和田有史　執筆：pp.43-57）
（学術論文） 1 食事場面における容器のアフォーダンスの記述	単著	平成18年3月	東京大学大学院教育学研究科修士論文 （総頁数89p）	３種類の食器を用いた成人の食事を観察し、食器操作の種類と現われ方を箸の操作と関連付けて質的に分析した。その結果、食器操作は主に箸の補助であること、より具体的には食器の立ち上がった面がすくう際によく使用され、立ち上がった面がない場合には食具や食物で食物を押さえたことが明らかとなった。平皿など食器が食物を押さえる機能がない形状の食器では、他の対象を同じ機能で利用した。また食事の進行（食物の減少）も操作を変化させる要因であった。
2 食事における容器操作の縦断的観察 −容器の発見と利用の過程−	単著	平成23年3月	質的心理学研究10号pp.25-45	発達を、「周囲の環境の意味の発見と利用の過程」と捉え、乳児が食器のアフォーダンスを発見していく様子を分析した。対象児は単に食器に食物を収めるだけでなく、元々その食物が盛り付けてあった食器に戻したり、食べるものを食器に入れ、食べないものを食器の外に出すといったように食器を異なる様々な意味で利用していったことが明らかとなった。加えて、観察当初は食物をいじる場所としてテーブルと食器の両方が利用されていたが、後者のみが利用されるようになったことから、テーブルと食器は徐々に分化していくことが示唆された。
3 手づかみ食べに対する母親の環境調整的働きかけ	共著	令和元年12月	乳幼児医学・心理学研究28巻2号pp.133-144	離乳期の母子3組の家庭での食事を縦断観察した。早期から手づかみ食べをする子どもの母親は、子どもの手の届く範囲（自由領域）に食器具を移動するなど積極的な環境調整で手づかみを促進し、手づかみ食べの開始が遅い母子では自由領域に食器を入れる頻度が低く、食卓が汚れることへの対処が顕著であった。共同研究により担当部分抽出不可。主に方法のカテゴリー設定と考察を担当した。 （鹿田みくに、外山紀子、青木洋子）
4 Mowing Patterns Comparison: Analyzing the Mowing Behaviors of Elderly Adults on an Inclined Plane via a Motion Capture Device	共著	令和2年12月	IEEE ACCESS Vol.8 p.216623-216633	農業従事者の高齢化・人口減少に伴い、広島県内の急勾配の農地では人力による法面草刈り従事者の確保が喫緊の課題となっている。本研究は危険が伴う急勾配での草刈り作業を動作解析によりモデル化し、後継者教育や遠隔監視による安全確保に役立てることを目標としている。モデル化のための動作解析から、急勾配での姿勢維持には左足首が大きく寄与し、腕の動きは草を刈る動きと刈った草を滑りにくく配置する動きに大別されることが明らかとなった。共同研究により担当部分抽出不可。主に動作の分類を担当した。 （Wu,B.,Wu,Y.,Aoki,Y.,Nishimura,S.）
5 １～２歳児のごはんをすくう行為の分析――食べ物の変形と食事道具の利用の観点から	単著	令和6年3月	質的心理学研究23号pp.59-77	スプーン食べ期の保育園 1 歳児クラスの子ども2名を対象に、ごはんをスプーンに載せる操作を生態心理学の観点から分析した。その結果、食べ物の分割はできるが、かき集めることが困難なこと、予期が及ぶのは「一口」程度であること、

				食器の手前やスプーンを握る手と反対側が「すくいやすい」部分になることが推測された。また、運動発達的に高度な「手首の回転」を使ったすくい方は、スプーンの上の食べ物と食器の接触面積を大きくして崩れにくくさせる操作と解釈された。幼児は道具を組み合わせて、新たなアフォーダンスを発現させていた。
（その他） （学会発表・口頭） 1 行為の中で発現する対象の価値の記述	単独	平成20年6月	第22回日本人工知能学会全国大会：ときわ市民ホール／勤労者福祉総合センター	道具使用の際に生起する行動パターンの変化とその発達を分析するため、成人の食事を対象にした観察を行い、同じ食器でも食事の進行によって使い方が異なること、立ち上がった面のない平皿の時はナイフの刃で食物を押さえていたことを明らかにした。モノと行為の関係を道具論的に考察すると、道具の機能すなわち価値は行為によって変化することが示唆された。 （『日本人工知能学会大会全国大会第22回論文集』3B3-6）
2 食事における落下回避行為と道具使用に関する考察	単独	平成20年8月	日本生態心理学会第2回大会：札幌学院大学	道具使用の際に現れる姿勢の変化の種類と、その変化に制約を与える環境要因を明らかにするため、成人の食事の観察を行った。その結果食物を口に運ぶ際に食器と口の距離が縮まることが明らかとなった。距離を狭める方略には、食器を手に保持し口に近づけるものと、食器を持たずに上体を曲げて口を近づける２つの姿勢が確認された。また食物のこぼれやすさと距離にも関係が見られた。成人の食器操作は、食物のこぼれやすさに制約を受けていると考えられる。 （『日本生態心理学会第2回大会発表論文集』pp.13-14）
3 乳幼児の食器操作の縦断的観察-＜叩く＞操作の変化の過程（その１）	単独	平成22年9月	日本生態心理学会第3回大会：京都ノートルダム女子大学	乳幼児の食事場面における行動レパートリーの変化と発達について、特に食器を〈叩く〉という行動に着目して分析した。乳児の家庭と保育園の縦断観察から、前者では月齢により〈叩く〉操作が食器から食物へ向かい、動きも微細に変化することが分かった。後者では、１回の食事に動きの大きい〈叩く〉と小さい〈叩く〉が混入していることが判明した。前者は食事の後半に多く観察されるなど、両者の現われ方には違いが見られ、異なる意味合いの操作と推測された。 （『日本生態心理学会第3回大会発表論文集』CD-ROM）
4 包囲する物・場所と行為の発達-食器・段差・つかまり立ち-	共同	平成24年3月	日本発達心理学回第23回大会：名古屋国際会議場	乳児が周囲の環境との相互作用を通して発達していくことを、食事道具操作、移動の発達、つかまり立ちを例に議論した。食器を「食べ物を収める場所」として利用していく過程で、乳児は食べ物の出し入れをするなどの行動を経て、テーブルの上の空間と食器の内部を徐々に区別すると推測された。つまり食器の「意味」や「機能」の理解には、遊び食べと判断され得る物の探索や試行錯誤が不可欠であると結論づけられた。 （『第23回発達心理学大会論文集』佐々木正人、細田直哉、山崎寛恵、青木洋子　頁不明）
5 食事場面における行動観察研究の可能性	共同	平成29年9月	日本心理学会第81回大会:久留米シティプラザ	食事は栄養摂取のみならず、社会的相互作用、文化的規範に則った行動が見られる複雑な場面である。動画分析ソフトを用いて食事場面を詳細に分析することで、新たな知見がもたらされるものと期待される。本発表では成人の食器具の操作を生態心理学の観点から分析し、食べ物の性質や食事の進行に伴う食べ物の減少に合わせて、箸や食器の操作を変化させていることを示した。つまり、道具操作の「巧みさ」が現れていた。 （『日本心理学会第81回大会発表論文集』CD-ROM 外山紀子、青木洋子、徳永弘子、古山宣洋、細馬宏通）

6 幼児期における食器を保持して食べる行為の発達 -食器と食具の把握形態の関連に注目して-	単独	令和元年11月	第 29 回日本乳幼児医学心理学会：九州大学	日本では食器を保持する等積極的な操作を行うが、食器操作の発達研究は僅少である。食器保持の獲得過程を明らかにするため、保育園児の給食を縦断観察した。その結果、2歳クラスの子どもは食器の縁を拳で握り、3歳以上児では手の平を上に向けた形状で食器を保持する傾向が見られた。手の大きさや巧緻性の発達、スプーンや箸など食具との関連などの観点からも分析を加えることが今後の課題である。 （『第29回日本乳幼児医学･心理学会抄録』p.12）
7 手づかみ食べから食具食べ移行期の食具を持たない手の動きと機能:食器操作への道筋	単独	令和5年2月	第 32 回日本乳幼児医学・心理学会：名古屋大学	実験場面ではなく、子どもが自然な発達環境の中で道具使用をどのように獲得していくか検討するため、子どもの生活の場である保育所で食事を観察した。両手の機能分化と協調の観点から分析を加えたところ、片手ずつの食器へのリーチ（分化）、スプーンへの両手の協応、スプーンと食器を左右の手で操作する協応が順に確認された。しかし0歳児クラスの子どもの非利き手を食器に添えるものの、固定する機能を果たしていない場合があり、操作スキルは未熟であった。 （『『第32回日本乳幼児医学・心理学会抄録』p.14』）
8 離乳期の「飲む」行為における食器把持と傾き制御の発達的変化	単独	令和7年2月	第 34 回乳幼児医学・心理学会：大正大学	離乳期の子どものコップ飲みスキルの獲得過程を明らかにするため、保育園0歳児クラスの食事を縦断観察し、椀型食器で液体を飲む行為を定性的に分析した。その結果、月齢が低いうちは、食器を運搬せず、顔を食器に接近させる様子が観察された。また湯呑みを両手で包み込んで保持する左右対称の操作は観察初期に、片手は食器の底を支え、もう一方は側面で傾きを操作する左右非対称の両手操作が観察後期に見られた。（『『第34回日本乳幼児医学・心理学会抄録』p.18』）
（学会発表・ポスター） 1 食事場面における食器の役割-発現する行為の観点から-	単独	平成 18 年 10 月	日本生活学会第 34 回秋季研究発表大会：浅井学園大学	成人の食事観察から、食器の立ち上がった面は箸ですくう時に食物を押さえる役割を果たしていたことが分かった。食器に立ち上がった面がない場合は、ナイフの刃などが同じ役割を果たしていた。 （大会論文集なし）
2 Affordance of Containers at Meal Settings	単独	平成19年7月	14th International Conference of Perception and Action(ICPA14 第14回 知覚と行為に関する国際会議：横浜赤レンガ倉庫)	道具の形状が行為に与える制約を検討するため、円形と四角形の食器を用いた成人の食事を観察した。食器が円形（丼と箸を使用した食事）の時は食器を回すことで食物が身体に対して同じ位置にくるよう調整し、一定の位置ですくっていることが分かった。四角い食器の時にはこの様な使い方は見られなかった。食器の形状は食器操作に影響を与え、円形の食器は箸ですくう動きを一定に保つことをアフォードしていた。 （“Proceedings of 14th International Conference on Perception and Action”, Lawrence Erlbaum Associates pp.230-231. ISBN 0805863575）
3 乳幼児の食器操作に見られる「叩く」の発達的変化	単独	平成22年6月	日本赤ちゃん学会第 10 回学術集会：東京大学	成人の食事ではあまり見られない乳幼児期の食器への複数回の接触の変化を縦断的に観察した。〈叩く〉操作とそれに類似した〈つつく〉などの操作の月齢ごとの現われ方を(a)操作に用いた身体部位または道具、(b)操作対象、(c)操作の様子の３点から分析した結果、(a)手から食具、(b)食器から食物、(c)〈つつく〉や〈触れる〉などの弱い操作に変化した。また食器への接触部分が食器の縁だったことから、形の探索行為とも考えられた。微細な操作への変化は運動発達に起因するものと考察された。 （『日本赤ちゃん学会第10回学術集会抄録集』p.66）

4 乳幼児期に見られる食器操作の種類-保育園での観察から-	単独	平成23年3月	日本発達心理学会第 22 回大会：東京学芸大学	都内保育園の0歳児クラスの給食を縦断観察した結果、操作の種類減少していった。11ヶ月時には見られ16ヶ月時には見られなかった操作は、〈口をつける〉、〈中身をいじる〉、〈倒す〉、〈左右に動かす〉、〈上下に動かす〉、〈擦る〉だった。食器を〈払う〉操作は保育士のフィーディングへの拒否表す操作と考えられた。また、食器を〈持つ〉様子が11ヶ月時に見られなかった理由として、食器が磁器製で重いことが考えられた。（『日本発達心理学会第22回大会論文集』p.674）
5 幼児期の食事におけるスプーンを持たない手の観察	単独	令和元年9月	日本質的心理学会第 16 回大会：明治学院大学	箸などの食具と食器の両手操作を子どもがどのように獲得していくか明らかにするため、食事場面での幼児のスプーンを持たない手の動きを分析した。その結果、食器の保持・固定以外にスプーンに食べ物を載せる、口に食べ物を押し込むといった動きが観察された。また、スプーンを口に運ぶ際にスプーンと一緒に口に向かって動く様子も観察された。スプーンを持たない手は食器の操作以外にスプーンの補助に使われていた。（『日本質的心理学会第16回大会プログラム抄録集』p.81）
6 幼児期のごはんをすくう行為の分析-食べ物の変形と食器の利用の観点から-	単独	令和3年3月	第 32 回日本発達心理学会大会：オンライン	1～2歳の道具食べ期の子どもが主食のごはんを「すくう」動きを縦断観察し、食べ物の変形やスプーンと食器の操作がどのように上達していくか質的に分析した。その結果、スプーンを垂直にごはんに突き刺す動きでは食べ物は分割できず調整に失敗し、また月齢が増加するとスプーンの先から側面にかけて食器に接触させ、より確実に食べ物をスプーンに載せる動きが現れることが分かった。（『第32回発達心理学大会論文集』　CD-ROM）
7 1歳児のものでの遊び込み場面から保育環境を考える	単独	令和4年3月	第 33 回日本発達心理学会大会：オンライン	保育園1歳児クラスの男児がテラスで靴遊びと枝遊びをしている場面を分析したところ、モノ遊びと大人とのインタラクションが同時に生じていることが分かった。男児の移動の出発点と到着点に大人がおり、大人とのインタラクションをきっかけに探索の様相が変化した。またインタラクションしている大人が他者と会話をするなど男児から注意が逸れると移動しており、遊び込みには人的環境も影響することが示唆された。（『第33回発達心理学大会論文集』　CD-ROM）
8 歯ブラシのど突き防止プレートによる傷害の要因となる乳児の身体及び行動特性に関する探索的分析	単独	令和5年8月	日本赤ちゃん学会第 23 回学術集会	2022年12月に喉付き防止プレート付き歯ブラシを使用して、乳児が口腔内に裂傷を負った。この傷害発生要因の解明に向け、乳児が歯ブラシを口にリーチングさせる動画を探索的に分析した。口への到達時のプレートの向き・把握部分・把握形態の分析結果から、低月齢児は指でプレートを押すよう把握するため、プレートがずれて口腔内に入り込む危険が、高月齢児は、ブラシ部分でなく円盤の端が口に到達し、口腔内に入り込みやすいことが示唆された。（『赤ちゃん学会2023ポスター抄録』p.65）
（報告書等） 1 恐竜のティーポット	共著	平成23年3月	慶應義塾大学首都圏ふたごプロジェクト(ToTCoP)『ToTCoPだより15号』	双生児の幼児を対象としたコホート研究調査協力家庭の養育者向けにプロジェクトの活動を報告する冊子のコラムにおいて、見立て遊びのエピソードを紹介した。36ヶ月の双生児のままごとを観察中、カップとソーサーはあるがポットは用意されていない状況で子どもは恐竜のおもちゃをポットに見立てお茶を注ぐ動きをした。恐竜を横から見た形状は、首から頭部にかけてはポットの注ぎ口に、尻尾は持ち手に似ていた。子どもは大人とは異なる視点で形状の類似性を知覚していた。（安藤寿康・藤澤啓子・石井佑可子・青木洋子・

				山形伸二・高橋雄介・米光育代・小久保絢乃　頁表記なし）
2 乳児期の食器操作の発達過程：学校教育における食育促進カリキュラムの基礎として	共著	平成 23 年 3 月	東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化センター「学校教育における新たなカリキュラム形成」研究プロジェクト平成 23 年度報告書	保育園０歳児クラス男児２名の食事場面を 10 か月間、月１回の頻度で縦断観察した。確認された食器操作の種類は、家庭内の食事を観察した先行研究と概ね一致した。月齢とともに、食器に食物を「入れる」、「戻す」という使い方が顕著になった。これは、食器が食物を収める場所と認識され、食物を散らかさないよう制御しながら食べることが可能になっていく過程と解釈できる。本研究の結果は、保育や学校教育で食育を行う際の参考になると考えられる。 （青木洋子・山本尚樹　pp. 141-158）
3「プリモニ」で生ずる行為多様性について-3 歳から 5 歳児-	共著	平成 23 年 7 月	株式会社ジャクエツ環境事業遊具改良プロジェクト	株式会社ジャクエツのスプリングトイ「プリモニ」改良の為の調査研究を実施し、以下 4 点の知見を提供した。(1)学年と設置場所の違いで滞在時間が異なる傾向が見られた。(2)年少ではプリモニに座って揺らすことが難しいようであったが、年中以上では座って揺らすことが容易になっていくようだった。(3)バネの振幅の強度は、学年が上がる程大きくなった。(4)また学年が上がるとバランスが崩れやすい姿勢でプリモニに乗るようになり、このことが遊び方のバリエーションを増やしているようであった。 都内幼稚園での観察、データ分析、知見提供を担当した。 （佐々木正人・青木洋子　総頁数 26p）

（注）「研究業績等に関する事項」には，書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。